一、富貴寺の種子石に就いて

酒井富蔵

(一) 緒言

豊後高田市、大字蕗の国宝富貴寺は明治四十五年、工博天沼俊一氏による才一回修理以来、特に顕彰され、学会においても、富貴寺のよさは早くから認められています。今度の戦争により一部破損しましたが、文部技官鈴鹿雅正氏により才二回の修理が行なわれました。たま〳〵境内整理中、表題の種子石を発見しました。鈴鹿氏は「富貴寺顕彰誌」に此の事について記していますが、此の種子石に就いて、はっきり究明していません。それで私が昭和二十四年十一月「富貴寺」と言う小著を出した以後の事ですのでこれを補足する意味で、此の種子石に就いて、正しい種子の読み方、種子石と富貴寺との関係、金石文としての時代的考察を試みました。以下それに関して述べてみたいと思います。

(二) 所在

この種子石は富貴寺の大堂に向つて左側の笠塔婆の背後、権現社へ通ずる道がわずかに高くなつている所に埋れていたのを、現在の位置におかれたのです。この石の小口面に種子が刻んであり、この面以外には人工を加えていない所謂自然石であります。

(三) 種子石と称した理由

この石を仁聞石とか梵字石とか呼んでいますが、私はこれを種子石と称したいのです。そのわけは、梵字石という場合、梵字とは梵語を記すに用いる文字であつて、種子(詳しくは種子字、普通は種子又は種字と書き、何れもシュジと読む)と言う場合、必ずその梵字が諸仏、諸菩薩、諸天を現わすのであります。例えば釈迦如来は「バク」、地蔵菩薩は「カ」と言う様に、梵字を一字書いて仏、菩薩を現わしてありますから、つまり仏菩薩を現わす一種の符号となるわけです。さてこの様な種子は何を

拠り所にして作られたかと言うと、諸尊には各々の真言があり、普通には胎蔵諸尊は真言の首字、金剛諸尊はその尾字を用い、或はその尊の梵号の頭字或はその尊の本誓を表示する字、更には又「通種子」と言うのを用いる等いろ〳〵あります。要するに決していゝ加減に決めたものではありません。さて、われ〳〵が通常目撃する古遺物に現われている種子は、大概或る範囲に限られています。すなわち古遺物に見る種子はわが上代信仰を反映しているものです。昔の人達の信仰と言うものは、そんなに広範囲に且つ亦多種の仏に迄は及んではいません。仏教を専修する僧侶は別として、一般人の信仰対象となる仏は、ある程度限定されていて、突飛な仏菩薩が出て来る様な事は稀であります。大日・釈迦・薬師・弥陀さては聖観音・千手観音・地蔵或は不動明王といつた具合に、大概われ〳〵の耳に親しい諸尊が上代人の信仰対象であつたのです。亦一尊に多種の種子があつても大概はその中にある一字が普通に用いられたのであるから、古遺物に見る種子は、そうした立場から見て行けばよいのであつて、大体において、一尊一定の種子が用いられたとほゞ同様な結果になるのであります。以上述べた事からしてこの新しく発見された石を、梵字石と言うよりも、仏・菩薩を現わした種子で書かれている石と言う意味で「種子石」と呼ぶ事が、より妥当だと思います。この意味から、熊野梵字曼陀羅も、わたくしは種子曼陀羅と呼んでいるわけです。

(四) 種子の読み方と意味

鈴鹿氏は富貴寺頭彰誌の中で、大きい方の梵字を「ショウク」と読み主山神の種子とし、小さい方を「ベイロ」と読み曠野神の種子とし、この文字は、日本に梵字が伝わる以前のもの、渡来僧の作、すなわち仁聞の作、更に富貴寺の守護神であり、富貴寺は六郷満山以前の寺云々……と極論していますが、誤謬の点が多く、一応論題の外におくべきでありましよう。この種子は、そんなに難解な梵字ではありません。先きに三項において述べた様に、初歩の梵字の本を見たゞけで、この二字の種子はわけなく見出す事が出来ます。すなわち、大きい方の種子は「アーク」と読み、胎蔵界大日、小さい方の種子は「バイ」(又は「ベイ」と読む)と読み、薬師如来を現わします。天台関係の寺では大日と薬師は関係の深い仏で、たとえ大日及び薬師の二仏を種子をもつて石に刻んで現わしてあつたからとて何等不思議ではありません。次に種子を図示します。

石面の種子

この種子は石面のものを忠実に拓本としてとり、拓本を写真にとり、次いで石面を写真にとり、これを実に同一縮尺にして両者を比較し、ありのまゝを書き表わしたのが、此の種字です。

大きい方の種子は「アーク」で胎蔵界大日を表わし、小さい方の種子は「バイ」で薬師を表わします。

(五) 此の種子の時代的考察

さて此の図で明らかな様に、梵字の書風は、例えばア点の灯込みがはつきりしている事や、修行点・涅槃点（ねはんてん）等、すべてを通じて角張っている所等、鎌倉期のものと見てさしつかえありますまい。国東半島一帯に存する鎌倉期の石造美術品すなわち板碑・五輪塔国東塔・宝篋印塔等に刻まれた梵字体と違っているとは考えられません。尚、東大教授工博藤島亥次郎氏も富貴寺調査の際、この種子は鎌倉期のものだと申されています。熊野種子曼陀羅の種子とはその書風はいく分違っています。従って同系列・同時代との推断は一応避けねばなりません（拙著、熊野種子曼陀羅について）。

次に此の富貴寺のある国東半島景域は、宇佐文化の勢力圏内であり、宇佐の奥の院と称してもよいのであります。宇佐文化は早くから中央との文化交流があり、宇佐の勢力は中央に相当に反映している諸事実があります。それで富貴寺は、宇佐八幡の経済力により建立された寺であるから六郷満山以前の寺と言う事は当らない様です。従って此の種子石もそれ以後の作である事は論をまつ迄もありません。

以上の諸点から見て、此の種子石は鎌倉期のものであり、仁聞の作と言うのは避けたいと思います。

参考文献

(1) 金剛乗末裔・浄厳集七冊、悉曇三密鈔

(2) 悉曇末葉沙門澄禅・悉曇愚鈔

(3) 宮野宥智監修（寛文七年版）悉曇種子類聚二巻
(4) 寓智積葦雪道樹（元禄版）、悉曇摩多体文初学考要二巻
(5) 南条文雄著、梵学
(6) 川勝政太郎著、梵字講話
(7) 叡山沙門真源校、梵字雑名
(8) 服部清道、種子―仏教考古学講座才二巻
(9) 服部清五郎著、板碑概説
(10) 高田町青年連盟編、富貴寺顕彰誌
(11) 酒井富蔵著、富貴寺

二、梅遊寺の墨書十三佛板碑

（一）緒　言

梅遊寺は豊後高田市字一畑、畑の影平にある泉福寺末、曹洞宗の寺であります。此の寺の前庭の西側には色々の石造美術品があります。すなわち大分県で最古唯一のものとして知られている十三仏の種子を陰刻した十三仏板碑があり、その隣りに板碑の額部と身部の最上部を残す破損した板碑が一基。次いで建武の板碑、庚申塔が二・三基、国東塔、国東五輪、笠のない石幢などがずらりとならんでいます。今度私が新しく見つけた表題の板碑は、破損せる板碑の前に自然石のかつ好で伏していたものであります。以下それについて概略述べてみたいと思います。

（二）調査概略及び説明

さて私はこの板碑を起こして見ると、既存の十三仏板碑とそつくりの形をしており、頭頂部・額部が直線で区切られ、根部は基礎石があれば、はめ込まれる様になつていました。その基礎石は調べて見ると破損した板碑をおいてある台石がこの板碑の基礎石である事がわかりました。これで基礎石・身部が揃つて完全に板碑を復する事が出来たわけです。しかし身部には何等種子の彫込みがないので、無銘の板碑としては誠におしいと思い乍ら、何かないかと調べると、そこには墨書された種子が十三字あり、この板碑は十三仏板碑である事がわかりました。石質はこの附近に産出する角閃安山岩であります。一般の板碑に比して高さよりも幅が広いのは恐らく十三仏種子を記入する為めでありましよう。次にこの板碑の実測値及び略図を別掲します。

測定部位	測定値（糎）
総高（基礎を含まず）	118
碑身高	93
碑身幅（上下とも）	84.5
額部高	13
頭部高（中央部）	10
切り込み横線の幅	2
額部の前出	4
厚さ	15
根部高	9.5
根部の厚さ	15

第1図　測定値

第２図　墨書十三仏板碑立面図

碑銘の種子は㈢項にゆずり、十三仏種子の下部、すなわち根部に近き所に左より右に、祐正・徳法・妙浄・妙金・正徳・道円・道光・道妙・法玄・道円・道全・妙通・道秘・道林・道□・妙□□禅□と合計三十五文字（不明の個所は□印）が墨書されています。これ等の人々は恐らくこの板碑建立に関係した人の名前だと思います。板碑にこんなに沢山の人名が書かれてあるのも珍しい事です。この板碑は墨書されているので、或いは陰彫にする一歩前のもので、所謂未完成品ではあるまいかと思われますが、この附近の板碑には墨書されたものが相当に多いのです。例えば、すぐ近くの庵の迫の板碑の如きは誠に沢山の文字が墨書され、そのうらに文中三年（一三七四―南北朝）の銘も読みとれています。ですから墨書された板碑の完全なものであります。

（三）十三仏種子の読み方

碑名は才二図の通りです。種子を墨書してある所は、はっきり読みとれた種子ですが、白ぬきにしてある所は種子の一部が消えていたりして、読みとれない為、既に知られている十三仏と比較研究の結果、この種子であると推測して現わしたものです。次に碑銘の種子を次頁才三図に示しました。

種子	読み方	仏名
	かん	不動
	ばく	釈迦
	まん	文珠
○	あん	普賢

種子	読み方	仏名
	か	地蔵
○	あ	彌勒
○	ばい	薬師
○	さ	観音

種子	読み方	仏名
	さ	勢至
	きりく	彌陀
	う〜ん	阿閦
	ばん	大日
	たらく	虚空蔵

第3図　十三佛種子
（不明の個所には上部に○印）

(四) 時代的考察

さて問題はこの新しく発見した板碑の製作年代でありますが、既に知られている応永廿年（一四一三―室町初期）十一月四日とある十三仏板碑のそばにあり、その横は建武……（南北朝初頭）の板碑があり、墨書された種子は陰刻された種子と全く大きさ・筆勢・墨書と石彫の気分の違いのみで全く同じであること、更に墨書されただけに種子の筆勢は寧ろ陰刻のものよりすぐれたさびた味わいがあります。亦種子そのものの力は鎌倉期のごつさより寧ろ平安末期の弱さに通ずる点が多い様です。このことは此等美術品においては一般に強い時代の次は弱く、弱い次には強くなる傾向を帯びています。この境内にある他の石造美術品のすべてが室町期以後のものであること、更にわが国で十三仏の信仰の起つたのは吉野朝の頃からと称せられておること等からして室町期のものと見て差支えないようです。

（県立高田高校教諭）

参考文献

(1) 服部清五郎著、板碑概説
(2) 稲村坦元、板碑（仏教考古学講座）
(3) 宮野宥智監修（寛文七年版）悉曇種子類聚二巻
(4) 天沼俊一著、国東金石年表、同附図
(5) 河野清実、大分県の板碑（大分県史蹟名勝天念記念物調査報告書才十七輯）
(6) 川勝政太郎著、梵字講話